# 藩校進脩館跡
# 相原廃寺Ⅳ
# 中原遺跡

1991年度中津地区遺跡群発掘調査概報(Ⅳ)
中津市文化財報告 第11集

1992

中津市教育委員会

# はじめに

大分県の北部、周防灘に面した中津市は、古くから豊前地域の産業・経済の中心として発展してまいりました。特に、近年では国道１０号線中津バイパスをはじめとする、交通体系の整備が進み、工場・店舗・住宅などの民間開発をはじめ、公共施設の整備など都市機能は大きな変化をとげつつあります。

一方、そうした開発行為の増加は埋蔵文化財の保護にも大きな影響を与え、調査件数は年々増加の一途をたどっています。

こうした現状を踏まえ、中津市教育委員会では１９８８年度より国庫および県費の補助を受けて、市内に所在する重要遺跡を中心として確認調査を実施してまいりました。これは、各種開発行為に先行して重要遺跡の範囲、性格などを的確に把握し、必要な遺跡については事前に保護策を講じることを目的としたものです。

このような認識に立ち、今年度は藩校進脩館跡、相原廃寺、中原遺跡について調査を実施いたしました。これらの調査結果を今後の文化財保護行政に生かしつつ、より良いかたちでの文化財保護と開発との調整を図るよう、努力致したいと考えております。

おわりに、調査にあたりご協力をいただいた地元の方々、および、ご指導をいただいた調査指導委員の諸先生方、並びに県文化課をはじめ関係各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第です。

1992年３月31日

中津市教育委員会
教育長　武　信　　元

藩校「進脩館」扁額（中津市立南部小学校）

# 例　　言

一．本書は中津市教育委員会が1991年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。

一．調査は1991年度国宝重要文化財等保存整備事業費、及び1991年度大分県文化財保存事業費の補助をうけて実施した。

一．調査にあたっては地権者である恒住キサヨ氏、宮垣広幸氏に多大なご協力をいただいた。

一．調査期間中、調査指導委員の諸先生方の他、下記の方々にご指導、ご助言をいただいた。

木村幾太郎、玉永光洋（大分市歴史資料館）

一．調査団の構成は次のとおりである。

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 中津市教育委員会 |
| 調査責任者 | 武信　元（中津市教育委員会教育長） |
| 調査指導委員 | 賀川　光夫（別府大学教授） |
| | 小田富士雄（福岡大学教授） |
| | 後藤　宗俊（別府大学教授） |
| | 甲斐　忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長） |
| | 真野　和夫（　〃　調査課長） |
| 調　査　員 | 清水　宗昭（大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係々長） |
| | 栗焼　憲児（中津市教育委員会市民文化センター文化・会館係主任） |
| | 棚田　昭仁（　〃　嘱託） |
| 調査事務 | 宮崎　俊幸（　〃　館長） |
| | 上田　一孝（　〃　文化・会館係々長） |
| | 田中布由彦（　〃　主任） |
| | 渡辺　明美（　〃　臨時職員） |

一．本書の編集、執筆は栗焼、棚田が担当した。また、遺物整理は中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子（中津市文化財資料室）が行った。現場作業は以下の皆さんの協力による。

徳永賀子、黒川みゆき、黒川洋美、神崎文子、田原文子、中和代、井上巳徳、大久保国子、山内マツ子、小山トミエ、林静江

# 目　　次


第１章　地理と歴史的環境……（1）

第２章　藩校進脩館跡……（2）

第３章　相原廃寺……（8）

第４章　中原遺跡……（10）

# 第１章　地理と歴史的環境

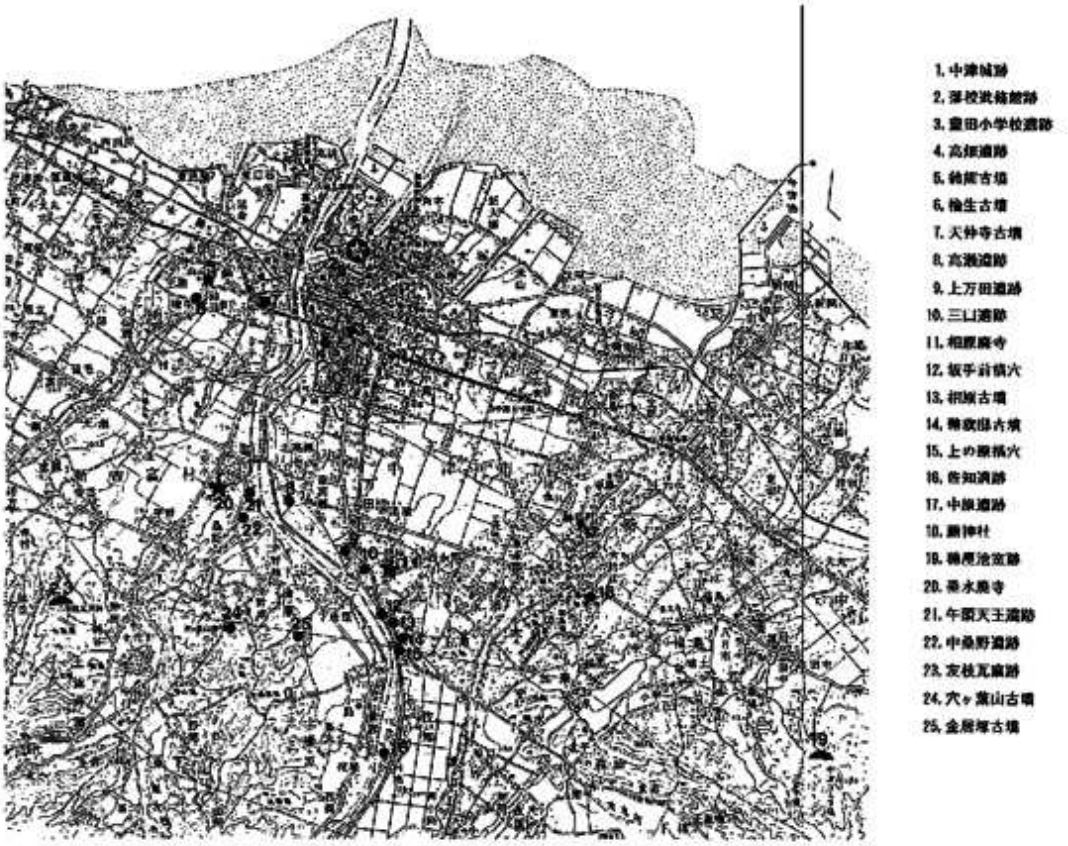



図１　1991年度調査遺跡及び主要関連遺跡分布図

大分県の北部、周防灘に面する中津市は、人口67,000人余り、市域55.67㎢を有する県北の中核都市である。

本地域の地形は、沖積平野である沖代平野と、洪積台地である通称下毛原台地によって代表される。遺跡の多くは下毛原台地と、山国川沿に発達する河岸段丘上に立地し、沖代平野には広大な条里遺構が展開する。

旧石器時代の遺跡は近年断片的ではあるが散見されつつある。その立地は洪積台地の先端部に多く認められ、後期旧石器時代に属する。

縄文時代の遺跡の多くもこうした洪積台地に立地する。これは縄文時代の海進状況を示していると考えられ、唯一、高畑遺跡のみが海岸部に近い河岸段丘上に立地する。

弥生時代と古墳時代の遺跡はほぼ分布域を同じくして立地する。多くは洪積台地には分布し、一部山国川の河岸段丘上や、八面山（標高659ｍ）から延びる高位の丘陵上に分布する。

七世紀以降、沖代平野には条里制がしかれ、現在に至るまで本地域の経済基盤の基幹をなす。

# 第2章　藩校進脩館跡

## 1.はじめに

藩校進脩館の創設は寛政2年(1790)で、寛政の改革後、全国的に藩校が急増する中で中津藩の藩士子弟の教育の場として奥平昌高によりつくられた。その内容、歴史的変遷については後述するが、弘化2年(1845)頃に描かれた中津城下絵図によれば、現在の中津市1367番地にあったことがわかる。この藩校進脩館跡を含む旧市役所跡地に、中津市立小幡記念図書館が新築移転する計画が決定したのは、1990年のことである。この決定をうけて、中津市教育委員会では埋蔵文化財の取り扱いについて内部協議を行った結果、藩校進脩館跡を中心とする図書館建設予定地一帯が、近世中津の城下町の変遷を知るうえで極めて重要な地域であることや、「八條平太夫」、「須田半弥」など上級士族の邸宅が城下絵図で確認できること、さらに、藩校進脩館跡が史跡として中津市の文化財指定うけていることなどから、事前に発掘調査を実施することとした。但し、付近一帯は近代以降各種学校や官庁などが幾度となく設置されており、特に、1983年までは旧中津市役所と旧公会堂が立地していたため、こうした点を考慮して調査区の設定を行うこととした。

## 2.調査の概要

調査は1991年12月15日～1992年2月20日まで実施した。調査にあたっては前述の事情を考慮して、現在の市道に面した部分に調査区を設定した。その結果、予想通り調査区の西側一帯には旧公会堂の基礎が認められ、遺構検出面にまで掘り下げられていたため、既に遺構は消滅していると判断した。また、その他の部分についても、旧市役所庁舎が存在したことから同様の結果が予想された。したがって調査は、僅かに遺構の存在が確認された調査区東側の約350㎡について実施した。

### 遺　構(図2、3図版1)

調査の結果、建物遺構2棟、土壙7基、溝状遺構2を検出した。

建物遺構は調査区北東側の隅で検出された。建物遺構1は板と竹を組み合わせた建築部材が倒壊した状況で検出されたもので、板塀ではないかと考えられた。また、建物遺構2は柱材を転用して基礎としたもので、下部には赤色レンガを据えていた。柱間は180㎝（1間）で、中央に排水用の溝(SD02)が検出された。

土壙は調査区内に散在するが、後世の攪乱によるものが多く、近世のものと考えられたのは7基であった。このうち、SK02・03については床面に拳大の河原石が敷きつめられた状況で検出された。溝状遺構のうち、SD01は片端町通りにほぼ平行するかたちで検出された。調査区西側でやや屈曲し、さらに西側へ延びている。深さは50㎝あまりで、土管が埋設されていた。

### 遺　物(図5、6図版4)

出土した遺物は近世のものから近代、現代のものまで多岐にわたる。そのうち、ここでは近世の所産と思われるものについて概観したい。

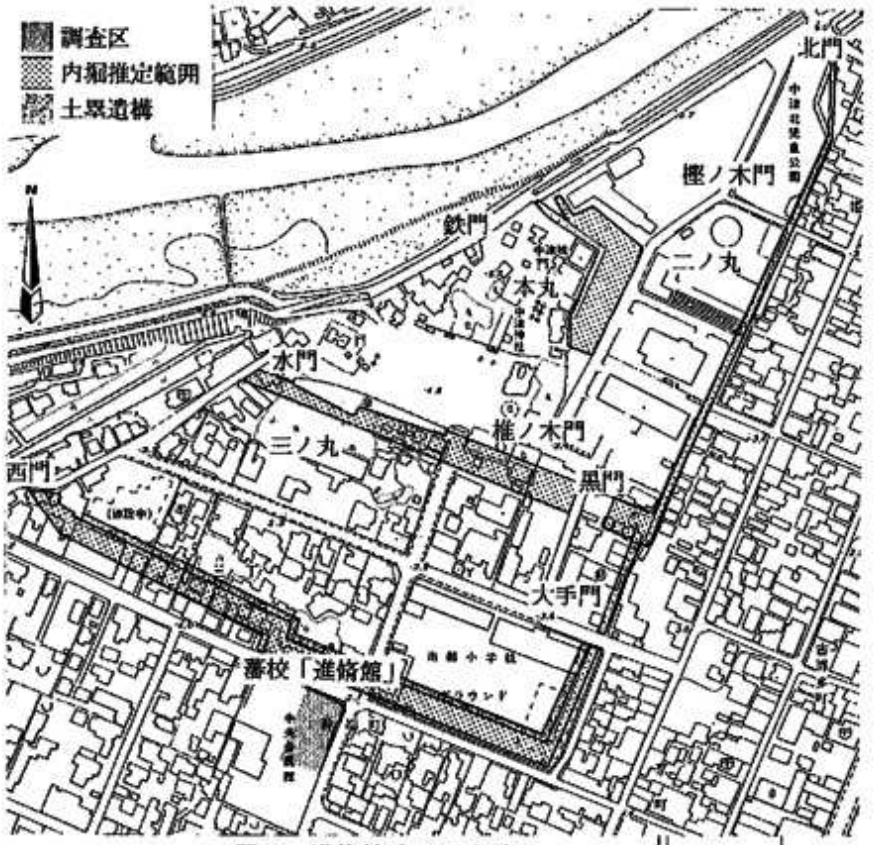



図 2　進脩館跡周辺地形図

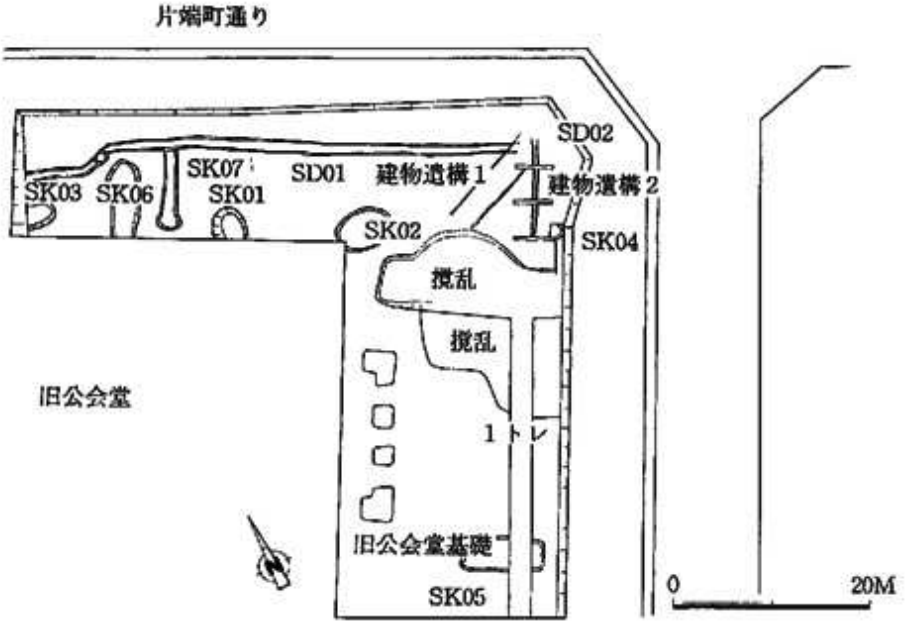



図 3　進脩館跡平面図

1は白磁の湯呑で、外面には朱色で人物と水辺の風景が赤絵で描かれている。口径7.4cm、器高7.2cm。2、3、4は染付の湯呑茶碗で、2は外面に草木文が描かれてている。口径9.1cm、器高6.0cm。3は外面に草木文、内面にコンニャク印判を配する。口径9.0cm、器高6.5cm。4は外面に花文、内面にコンニャク印判を配し、口径8.5cm、器高5.7cmを測る。5、6は青磁の煙草盆用火入れで、端部は内傾し底部には分厚い高台がつく。内面上半部にのみ釉薬がみられ、下半部は無釉。5の口径は11.8cm、器高7.5cm、6は各々11.4cm、8.0cmである。7,8はてあぶり火鉢の口縁部であるが、小片であるため全体の形状は推しえない。ただ、7は口唇部に「学」という線刻の落書きがみられ、8は外面に松が型押ししている。9は土師器の小皿で、底面には明瞭に糸きり痕を残す。口径10.1cm、器高2.0cmを測る。

10、14は鬼瓦の破片である。市内の近世寺院(自性寺《奥平家菩提寺》等)で使用されているものに類似資料が認められる。11,12は巴文の軒丸瓦で、珠文の数や瓦当の大きさなど、タイプがやや異なる。13は軒平瓦で、中心飾は均整唐草文を配する。15は鳥衾で瓦当面は巴文を配する。

16は硯で上端部「海」の部分が欠損している。「陸」には長軸方向に直行する傷が数条認められる。底面には産地を示す「赤間関」という線刻がみられる。

17～22は石筆で多量に出土している。これに伴って石板も多くしている。

## 3.まとめ

今回の調査では前述のとおり、限られた範囲での調査となったため、藩校進脩館について十分な成果を上げたとは言いがたいものとなった。

まず、建物遺構1,2については当初藩校進脩館との関連が考えられたが、部材の固定用に金属ボルトを使用していることから、少なくとも明治時代末～大正時代の所産と考えられた。時期的には中津商業学校、もしくは下毛郡役所との関連が考えられる。なお、遺構の切り合いから建物遺構1が廃絶した後に建物遺構2が建築されている。

土壙もほとんどが近世の所産と考えられたが、SK05については土師器の小皿が1点のみ出土しており、やや時代が遡上るかもしれない。

溝状遺構のうち、SD02については建物遺構2に付随する排水溝である。SD01は土管が埋設されていたものの、その配置に興味がもたれた。図4は藩校進脩館の見取り図であるが、これを見ると片端町通りに面した所に藩校進脩館の門があったことが分かる。これと今回の調査結果を照合すれば、SD01が調査区西側で屈曲する地点が丁度その門の位置に当たる。また図示はしていないが、遺構検出面から10cm程度浮いた状態で、礎石と思われるものも確認されている。したがってSD01は藩校進脩館の暗渠排水と考え、埋設されていた土管は後世の再利用によるものと考えたい。

なお、調査区中央の攪乱は1トレの土層面及び出土遺物から見て、昭和時代の前半期の攪乱と考えられた。

出土遺物のうち陶器類は日用雑器が多い。瓦類は軒丸、軒平のほか、鬼瓦や鳥衾などがみられることから、建物はかなり大規模なものであったと推定される。この他、石筆、石板、硯などとは藩校進脩館をイメージさせるものであり、「学」の線刻がなされている手あぶり火鉢も興味がもたれる。

付稿.藩校進脩館の変遷にいて

藩校進脩館は中津藩５代藩主奥平昌高の意を受けて藩儒の倉成龍渚と野本雪巌によって寛政２年（1790）片端町に開設された。

校内には孔子を祀った聖堂や講釈を行う講堂、宿泊のための寄宿舎、周囲には諸々の武芸場や文庫等が建てられていた。文化９年（1812）には校舎が増築され、文政10年（1827）と天保14年（1843）には塾舎が補修され、晩香堂と呼ばれるようになった。

やがて維新を迎え、進脩館もその時代の変革に無関係ではいられなかった。明治２年（1869）には学規を改正し、入学者の身分制度撤廃等を行った。この頃より皇学科が設けられるようになり、中津皇学校と称した。この中津皇学校の設立の契機となったのは、渡辺重名の次男渡辺重石丸が道生館と名のる国学塾を営んでいたのだが、これが廃校となり、塾生らは藩に皇学校設立を要請したのだった。やがてこの願いは聞きいれられ、実現へと至った。

しかし、時代に対応するための努力も空しく、明治４年（1871）の廃藩置県により全国の藩立学校は悉く廃止となり、中津藩校進脩館もその幕を閉じた。

福沢諭吉が「学問のすすめ」の初版を世に出した明治５年（1872）には学制頒布がなされ、進脩館跡に片端中学が進脩館と皇学校を合併して開校した。これが県内初の公立中学となった。

そして片端中学は明治８年（1875）に改革を行い、教員養成の小倉県立片端養成校を附設した。しかし、明治10年（1877）には廃校となり、翌明治11年（1878）に大分師範学校に併合されることになる。

片端養成校が廃され、片端中学は改めて公立中津変則中学校として明治11年（1878）に再出発した。これもやがて明治20年（1887）には廃校となり、中津町外５ヶ村合立（ふるさと歴史年表では25ヶ村・大分県教育百年史では５ヶ村）の中津高等小学校がこの地に開校される。

やがて明治44年（1911）に下毛郡立高等女学校が中津高等小学校跡に開校され、翌明治45年には、その寄宿舎が設置された。

その後、大正３年（1914）に旧中津城内の「お花畑」跡に新校舎が落成し、下毛郡立高等女学校は移転していった。

大正５年（1916）、高等女学校跡の校舎に中津町立商業学校が開校した。当初は予科一年制で出発したが、翌大正６年に二年制に変更となり、甲種商業学校となった。そして大正８年（1919）には校名を中津町立商業学校より中津商業学校と改称した。大正10年（1921）には商業学校への入学志願者の増加に応じて定員数を増加した。このため中津商業学校は大正11年に大塚町に新校舎を建設し移転することとなった。

大正13年（1924）、殿町にあった下毛郡役所は片端町に新築移転された。しかし、大正15年（1926）に府県制・市制・町村制・北海道会法改正にともなって郡役所の廃止が行われ、新築よりわずか二年で下毛郡役所は廃止となった。

昭和２年（1927）、元下毛郡役所の建物横に中津公会堂が落成した。

やがて中津は昭和４年に県下で三番目の市制施行となり、この三年後の昭和７年（1932）には、中津市役所が下毛郡役所跡に二階を増築し、三ノ丁より移転された。

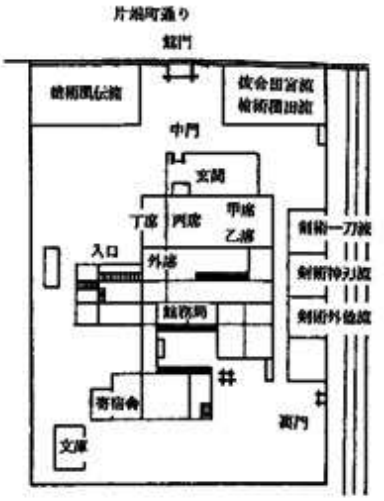



図４　進脩館見取図

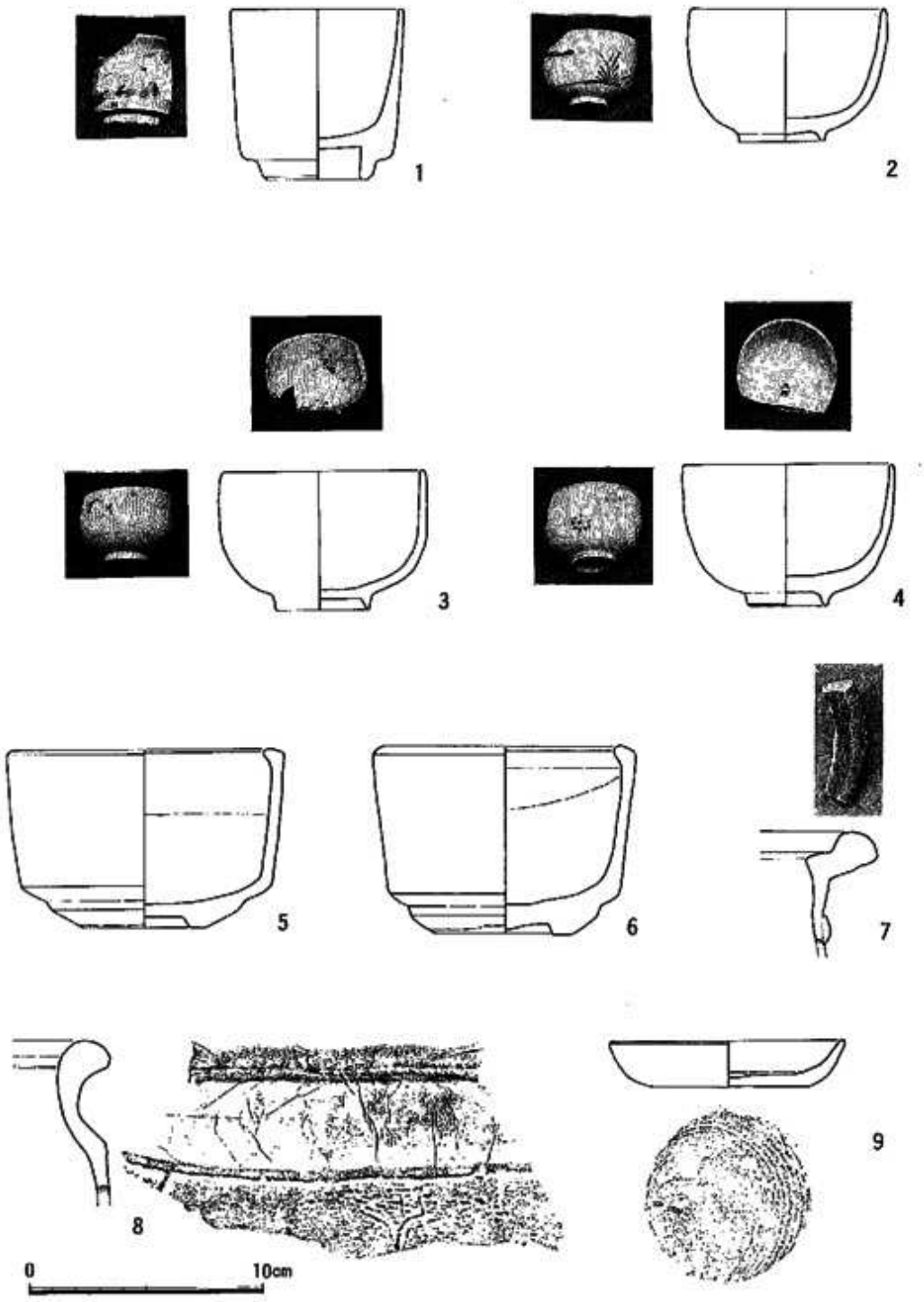



図5　進脩館跡出土資料実測図(1)

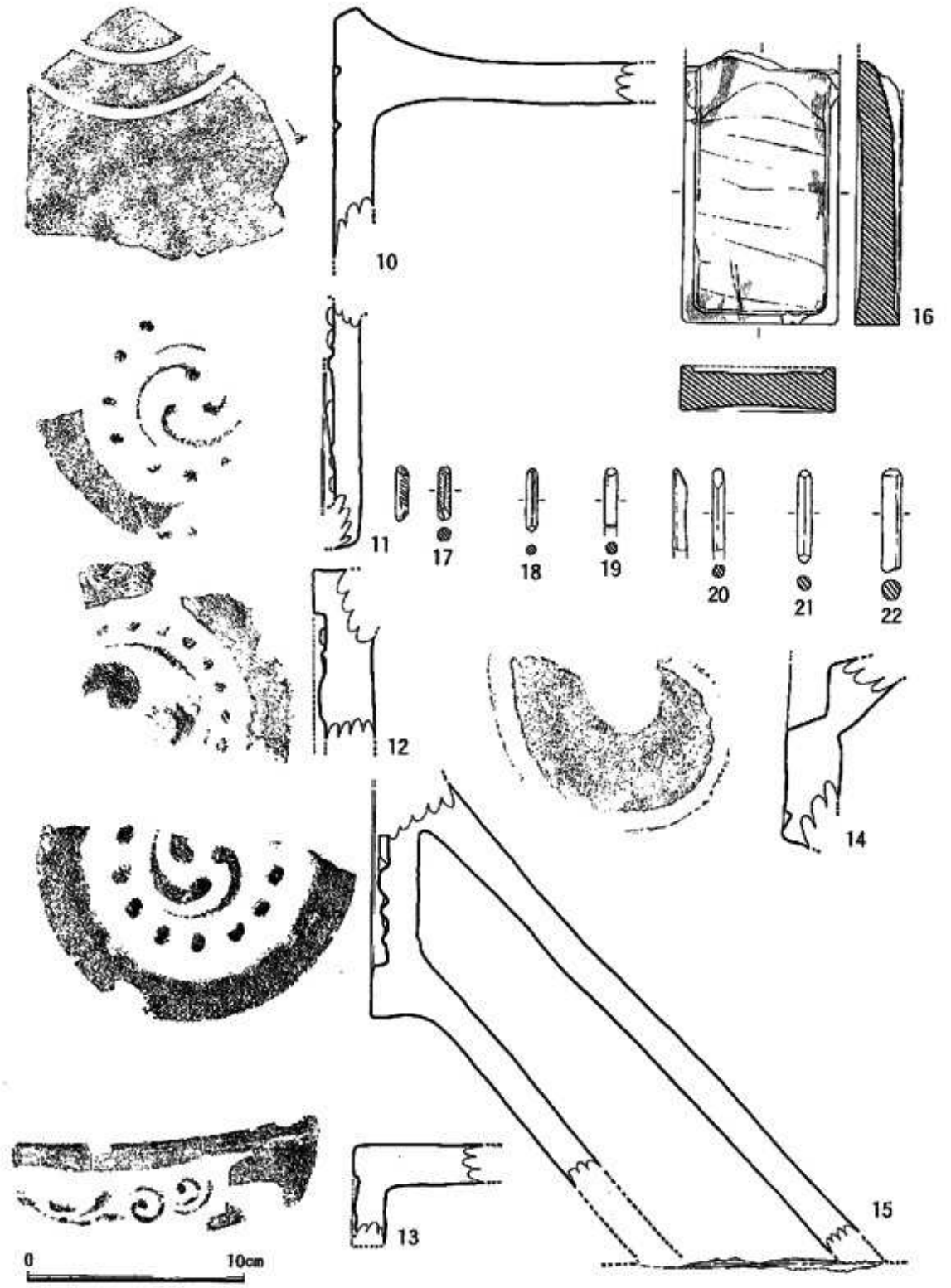



図6　進脩館跡出土資料実測図(2)

# 第3章　相原廃寺

## 1,調査の経緯(図7)

相原廃寺の調査は1988年より開始され、今年度で第4次の調査となる。調査は唯一遺構として残されている建物基壇(B地区)を中心として、寺域と伽藍配置の確認を目的として実施して来た。その結果、前年度までの調査では寺域西限を示すものではないかと考えられる遺構(SD26)や、建物基壇の南限、瓦溜や溝状遺構などを確認し一定の成果を上げることができた。しかし、建物基壇のほかには明確な建物遺構を確認することはできず、調査方針の見直しが必要となった。

そこで、今年度は建物基壇について再度、その規模や建物の種類の特定を検討することとし、主に基壇北側を中心としてトレンチを設定した。また、南側についても第1次調査で確認された基壇南限の延長線の確認のためトレンチを設けることとした。さらに、C地区東側についてもSD26に対応する溝状遺構を想定してトレンチを設定した。

## 2,調査の概要

### 遺　構(図版2)

まず、第11トレンチでは基壇南限の乱石積基壇端の延長線の調査を実施したが、基壇の高まりと思われた部分は後世の攪乱であり、版築は確認出来なかった。したがって乱石積基壇も確認出来ず、建物基壇東側は予想以上に後世の削平が行われていることが判明した。

第12、13、14、トレンチでは、建物基壇北限の確認を目的として調査を実施した。その結果第12、13トレンチでは建物基壇が乗っている硬質の基盤層の地形を確認したに過ぎず、基壇版築面を見ることは出来なかった。ところが、第14トレンチでは基盤層直上に版築類似の土層を確認し、さらに、西側で南北に延びる基盤層の落ちが確認された。また、この基盤層の落ちのやや北側には乱れてはいるものの、第11トレンチで確認されている基壇南限の乱石積に類似する石積もみられ、これが建物基壇西限を示す可能性が極めて高くなった。版築類似の土層は相原廃寺で認められる丁寧な版築技法比べると稚拙であり、本来の版築面とは言い難いが、この部分にまで版築基壇が存在していたことを推定する材料にはなると考えられる。仮にこれを肯首し、基盤層の落ちを基壇の西限と考えれば、B地区建物基壇の規模は南北13m(約43尺)と推定できる。

第15、16トレンチではSD26に対応する溝状遺構の検出に努めたが、明確な結果は得られなかった。但し、第15、トレンチ北側で第2トレンチ北側で検出されている溝状遺構(SD16)の延長と考えられる遺構が確認されたことから、寺域はさらに東側へ延びるものと推定される。

### 遺　物(図8 図版5)

今回の調査でも夥しい量の古瓦片が出土した。特に、第13、14トレンチでは上層部分は殆ど古瓦片が詰まった状況で、まさに瓦礫の山といった状況であった。その中で注目されたのは、軒丸瓦の殆どがA類(所謂九州式単弁瓦)であり、C地区で認められたように3タイプの軒丸瓦が同等に近い比率で混在する状況とは異なる点である。このことは一つに主要建物の建立の時期差を示すものかもしれない。

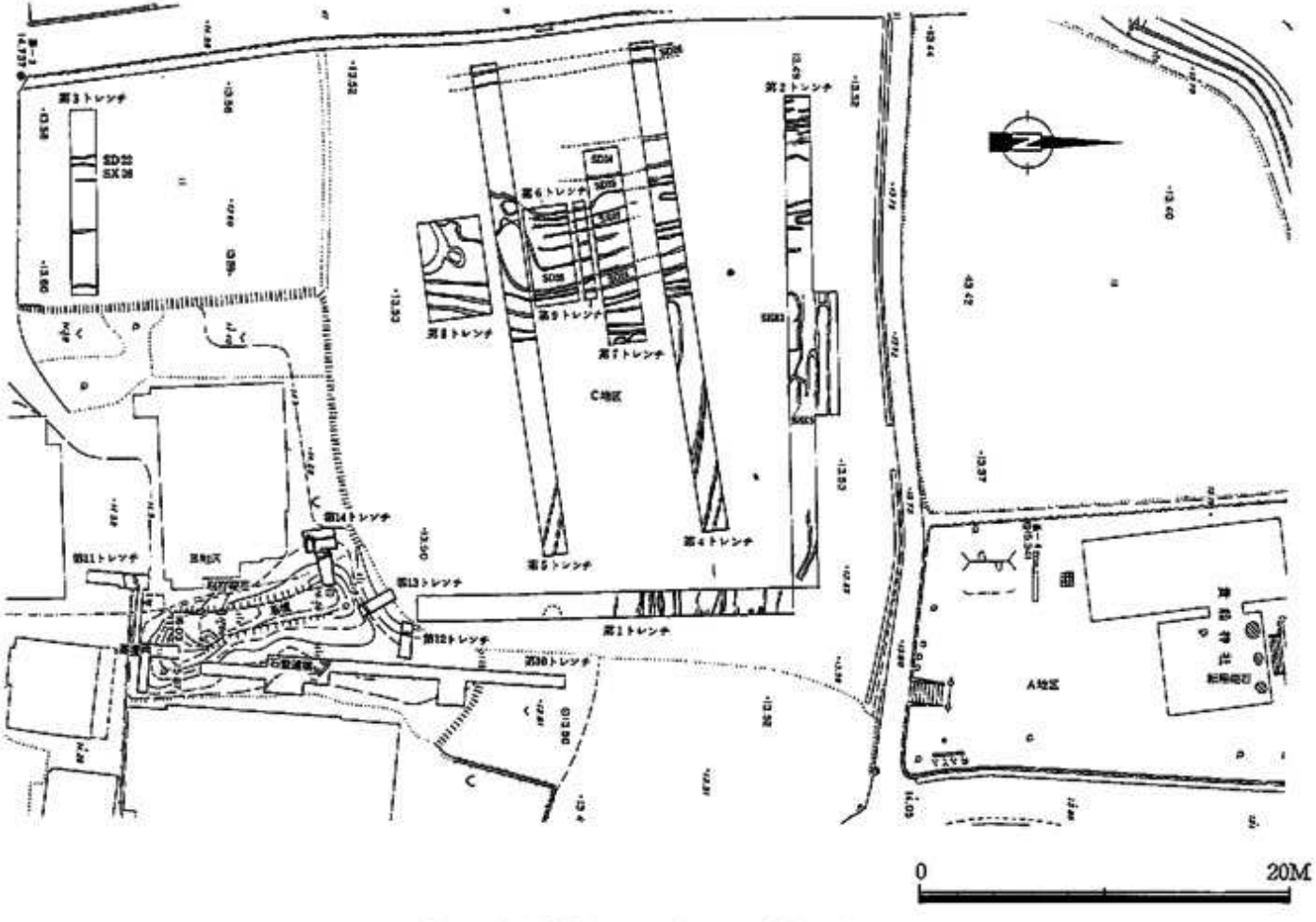



図7　相原廃寺周辺地形図及び遺構配置図

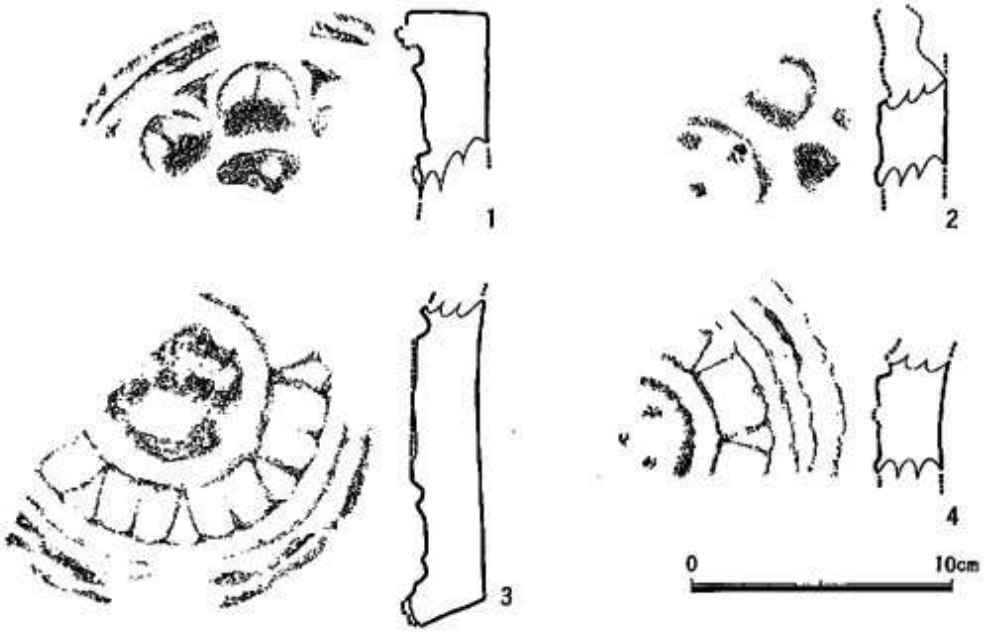



図8　相原廃寺B地区出土軒丸瓦実測図（S＝1/3）

# 第4章　中原遺跡

## 1,調査に至る経過

中原遺跡は中津市の中央部、下毛原台地の西側に位置する。遺跡分布図では今回の調査地点の北側に延びる台地上に位置するが、1983年に付近で宅地造成が行われた際、多量の土器が出土したことがあるため、周辺の台地を含め中原遺跡として周知している。また、南側1㎞程のところには中津の古代史の鍵を握ると言われる「薦神社」があり、歴史的にも重要な地域に所在している。

こうした状況の中、今回中津市で榊原地区に市営住宅建設の計画が持ち上がったため、中津市教育委員会では中津市建設部建築課と協議を行った結果、事前の確認調査を実施することとした。

## 2、調査の概要（図9、10 図版3）

調査は今年度建設予定地の全面を対象として、トレンチによる方法で実施した。付近は以前大蔵省の官舎など住宅が建設されており、かなりの攪乱が予想されたが、遺構検出面では比較的良好な状態で柱穴などが確認された。そして第6トレンチでは、南西方向から北東方向へ延びる幅2ｍほどの溝状遺構が検出され、南西側で直角に屈曲する状況が認められた。このため、第7トレンチを設定して確認を行ったところ、さらに東南方向に延びることが判明したため、1辺30ｍ以上の方形に巡る溝状遺構の存在が確定的となった。

以上の結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて建築課と協議を行った結果、建設予定地全面について本調査を実施することとした。なお、溝状遺構は中世に構築されたものと考えられた。

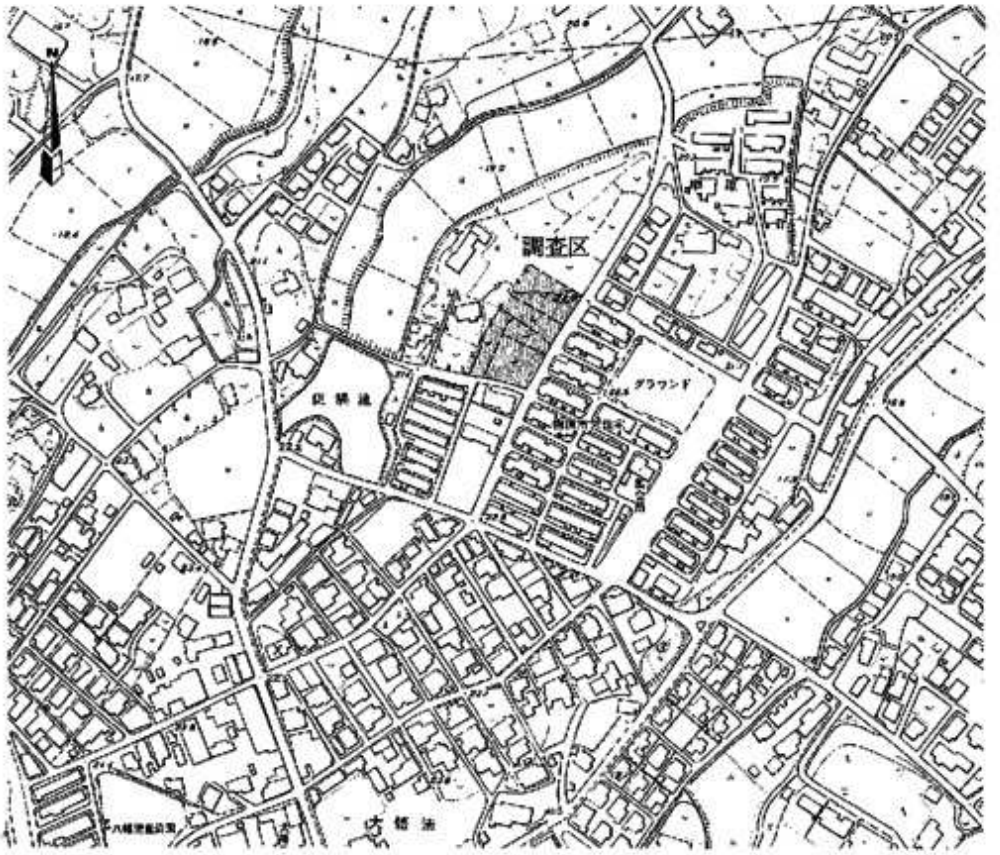



図9　中原遺跡周辺地形図

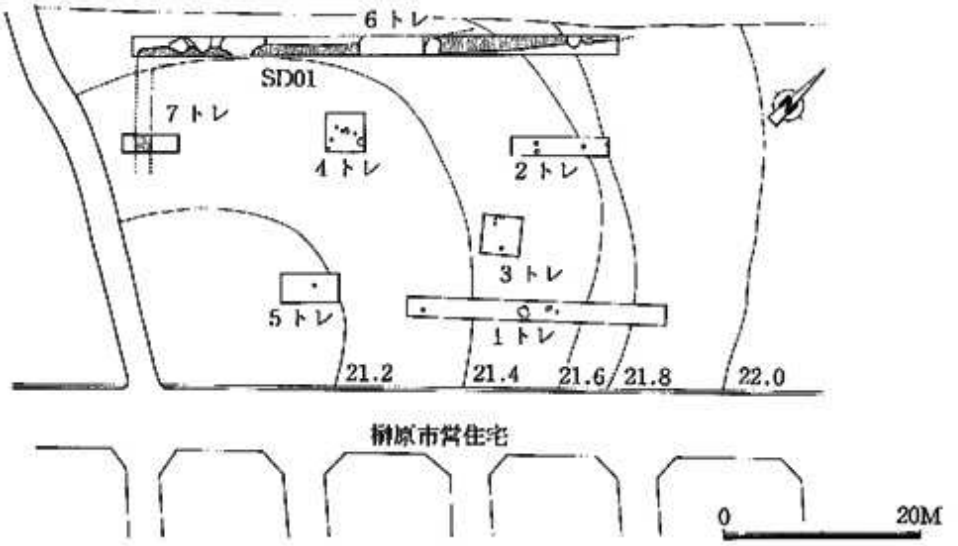
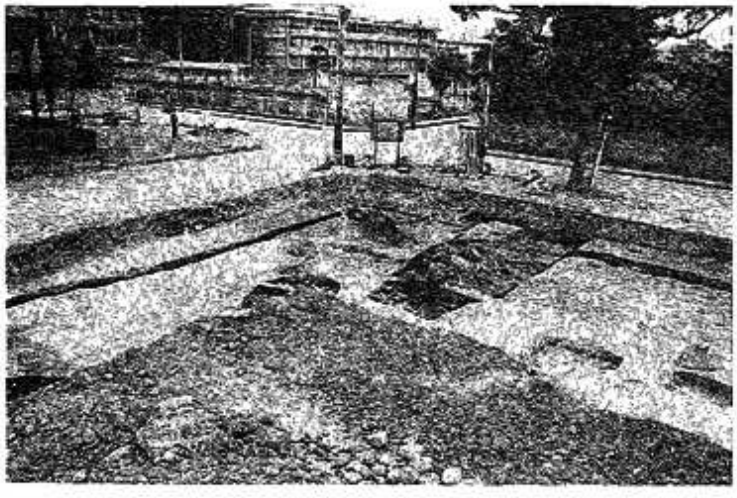
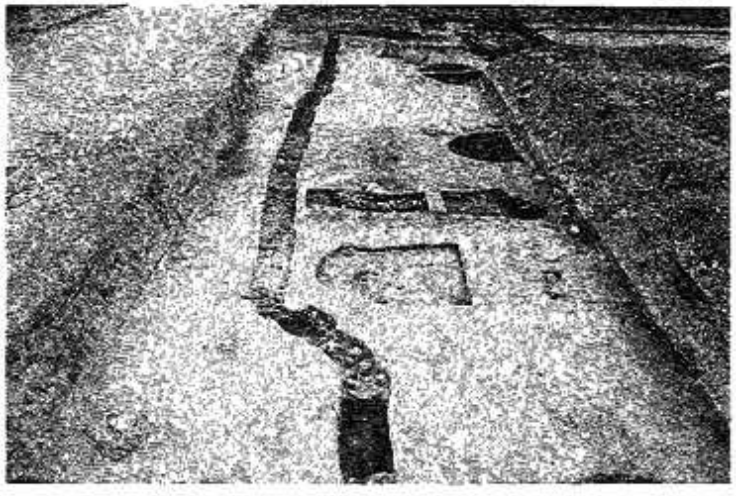



図10　中原遺跡遺構図



1）完掘状況

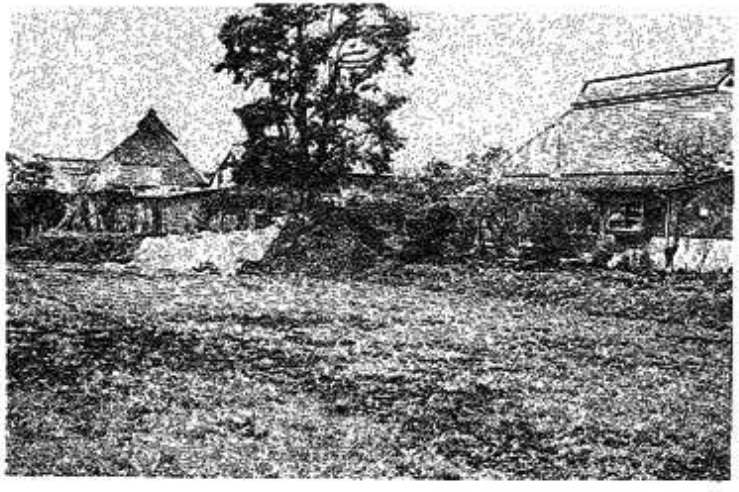


2）SD01及び推定門跡・完掘状況

3）建物遺構1．2．検出状況

4）第1トレンチ土層面

進脩館跡



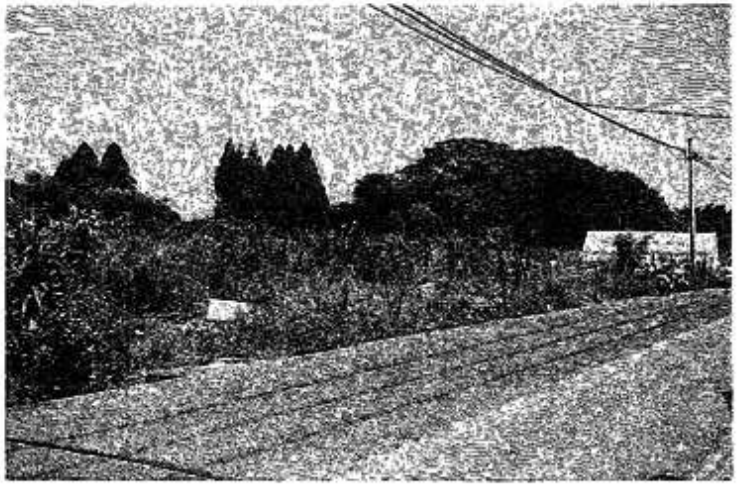
1）B地区調査状況

2）B地区第12．13トレンチ完掘状況

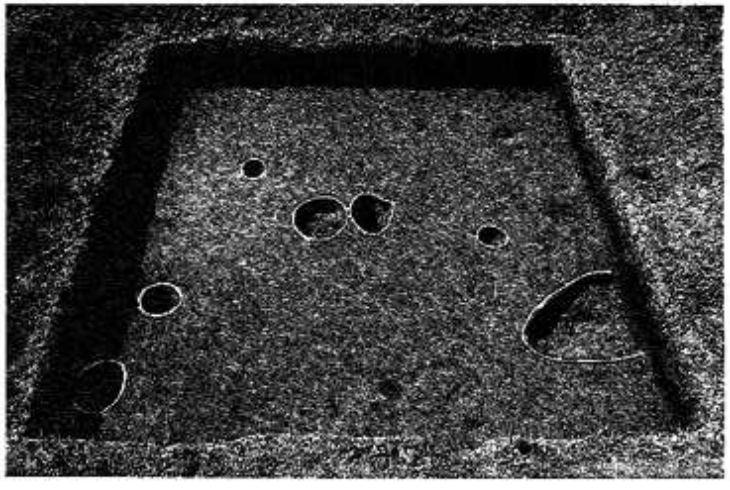
3）B地区第14トレンチ土層面

4）B地区第14トレンチ完掘状況

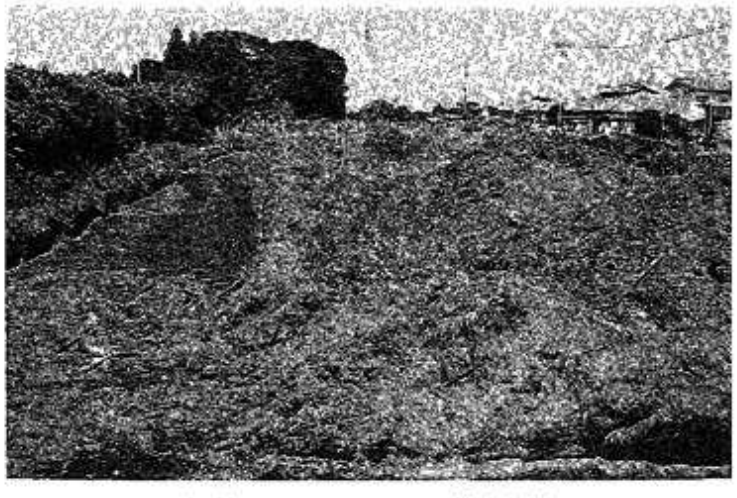
相原廃寺



1）中原遺跡（調査前）



2）第4トレンチ完掘状況

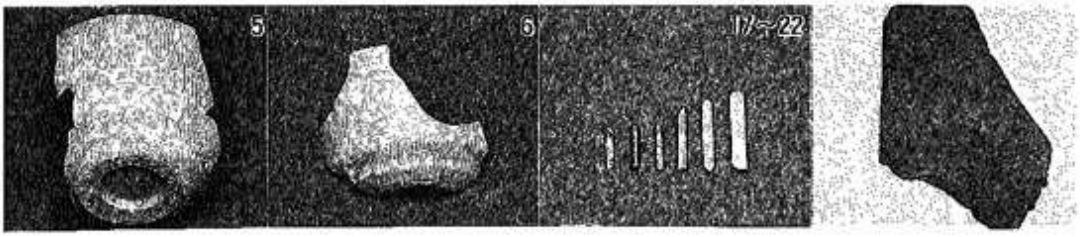


3）第6トレンチ、SD01検出状況

4）第1トレンチ完掘状況

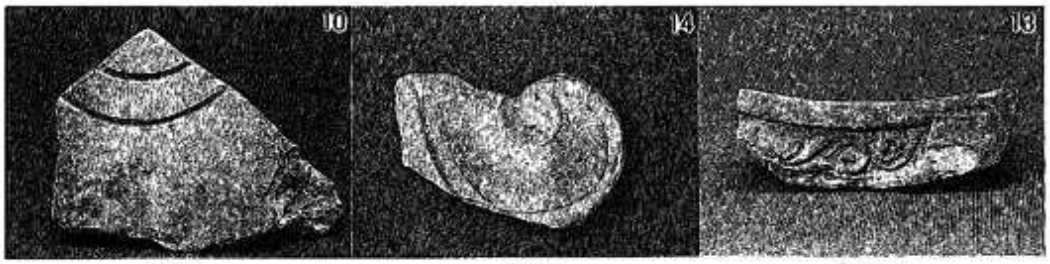
中原遺跡

図版 4




青磁椀　　青磁椀　　石筆　　石板

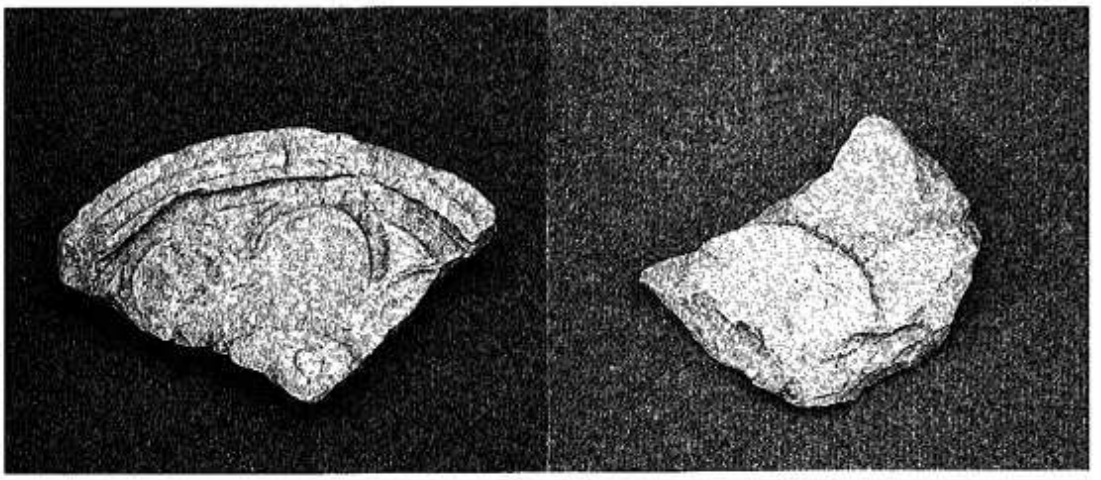
土師器小皿　　てあぶり火鉢　　硯　　裏面「赤間関」銘



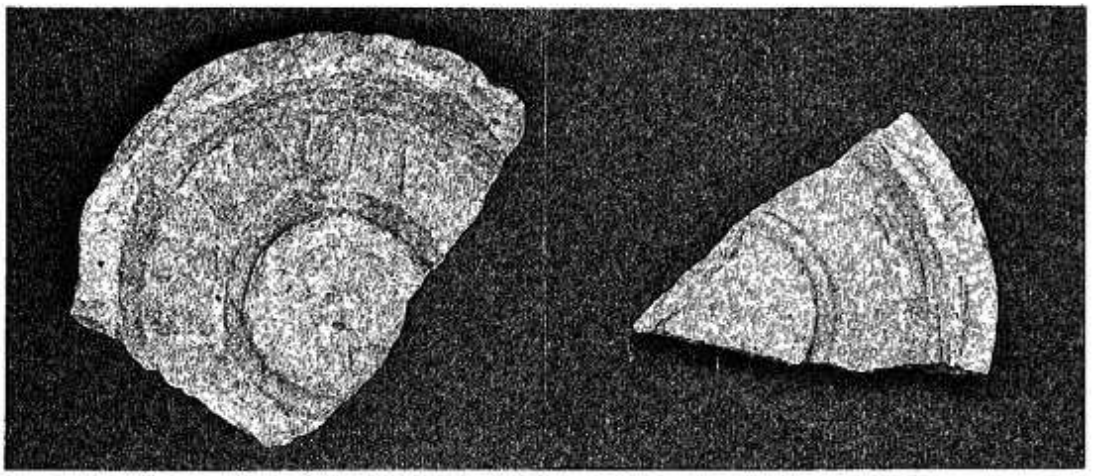

鬼瓦　　鬼瓦　　軒平瓦

軒丸瓦　　軒丸瓦　　鳥衾

図版5



1　A類　2　A類



3　B類　4　B類

相原廃寺B地区出土軒丸瓦

藩校進脩館跡
相原廃寺Ⅳ
中原遺跡

中津市文化財調査報告 第11集

1992年3月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　川原田印刷社